

「覚えられない記憶」

今は見ている物は暗い部屋を輝かしている。並んだ記憶。

今日はどんな記憶を見るの。

悲しい記憶かな。優しい記憶かな。それとも、二つの想いが重ねた美しい記憶かな。

列の一つ目の記憶を取ると、全体が冷えた。これはとても悲しい記憶だろう。

見てみよう、この記憶を。

駅のホームに座っていた二人。一人は何かを囁いて、一人は難しい顔をしていた。男女の失恋の記憶だろう。一粒の雫が落ちた。

もう一つの記憶を見ようか。

暖かそうね、この夕陽のような光を発散している記憶は。

日付は何だっけ？

思い出せない。当然。この部屋はもうすぐ忘れる記憶の。それでも、日付だけを思い出したい。この記憶の形を見るだけで、忘れたくない思い出だと思う。

内容は、電車の中で、二人が手と手で繋がれて、目と目で惚れた人を見る事。曲が聞こえる。二人の頭の中で再生している曲。大切な人の傷を治したい。そんな歌詞がある曲だ。

一秒が経って、記憶と曲が消えた。悔しい。

最後の記憶を見ようか。

時計が見える。ベッドの上に座っていた自分が見える。手でスマホを持っている。

一秒が経って、通知の音が鳴る。大学の先生のメールなんだ。溜息をついた。

一分が経って、通知の音が鳴る。彼女の名前を見ると、メールを開ける。

『だいきらい』

消した。そんな記憶がいない。

そして、目が開けた。俺の部屋を見回す。ここに俺しかいない。

スマホを点くと、日付を確認する。

「あつ、初デートの準備をしなきゃ」 (599 字)